

冷式抗体の臨床的意義について考える

清水 勝

キーワード：冷式抗体，溶血性副作用，輸血療法の安全性

本誌に友田らの冷式抗体についての論文が掲載¹⁾された。それによると、15 医療施設の共同研究として、冷式抗体保有 55 例に対応抗原陽性血の輸血が行われたが、溶血所見は認められなかったという。未だに冷式抗体による溶血性副作用を懸念する向きのあることを考えると、一つの成果といえるであろう。しかしながら、2 つの問題点を指摘したい。

第一は、引用文献について、内川の日本人でのエビデンスを示した論文は少ないと言及した論文 (2004 年) と Okutsu らの遅発性溶血反応を見た 24 例中に冷式抗体の関与例はなかったとの論文 (2011 年) が引用されているが、それらの報告以前にも関連した文献がある。一つは、37°C で反応する抗体 (即ち、冷式抗体は考慮しない) を重視するとした現行の「輸血療法の実施に関する指針」(初版は 1989 年) である。もう一つは、冷式抗体保有例への輸血についての松山らの報告 (1989 年)²⁾ないし濱田らの論文 (1998 年)³⁾である。松山らの報告には、抗 Le^a 抗体を除く冷式抗体保有 76 例、また濱田らの論文には、抗 Le^a 抗体を含む冷式抗体保有 27 例について、それぞれ対応抗原陽性血の輸血による問題はなかったことが記載されており、本邦での冷式抗体の臨床的意義について論じた最初のものと思われる、いずれも本誌に掲載されている。

第二は、結語で「今後更に症例の集積を待つ必要がある」というが、どの位の症例を蓄積すれば、結論が出せるのであろうか。筆者の知る限りでは、冷式抗体を無視して輸血したことにより、溶血を起こしたとの

報告は、内外ともない。また、筆者が以前所属していた医療施設では、冷式抗体を無視して毎年多くの赤血球輸血が行われていたが、冷式抗体によると思われる溶血例は 1 例も経験しなかった (私信)。友田らの論文に関与した参加施設の多くは、冷式抗体を無視して輸血しているということから、参加施設を始めとして、全国的に冷式抗体による溶血例の有無を調査してみることも一考に値するであろう。

筆者は、臨床的に意義のない冷式抗体の同定などに必要以上の労力を費やすのではなく、もっと他の有意義なことにその労力を振り向けることにして、仮に将来冷式抗体による溶血例が見つければ、その抗体の性状を検討して、対策を講じることでよいのではないかと考える。

著者の COI 開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

文 献

- 1) 友田 豊, 東谷孝徳, 遠藤輝夫, 他：冷式抗体保有患者への対応抗原陽性赤血球製剤輸血：多施設共同研究による冷式抗体の臨床的意義の評価. 日本輸血細胞治療学会誌, 59 : 733—739, 2013.
- 2) 松山由美子, 岡本好雄, 中林恭子, 他：低温反応性抗体保有者への型不適合輸血. 日本輸血学会誌, 35 : 199, 1989.
- 3) 濱田貴子, 加藤真奈美, 木島嘉子, 他：冷式抗体保有患者への輸血用血液の選択時に冷式抗体を無視することの当否. 日本輸血学会誌, 44 : 27—32, 1998.

RETHINKING ABOUT CLINICAL SIGNIFICANCES OF COLD REACTIVE ANTIBODIES

Masaru Shimizu

Transfusion Medicine Section, Tokyo Metropolitan Hiroo Hospital

Keywords:

cold reactive antibody, hemolytic reaction, transfusion safety

©2014 The Japan Society of Transfusion Medicine and Cell Therapy
Journal Web Site: <http://www.jstmct.or.jp/jstmct/>